

氏名（本籍）	大島 卓		
学位の種類	博士（デザイン学）		
学位記番号	博甲第	7416	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	福島県岩瀬牧場の近代化産業遺産としての価値と保全に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐 浩也
副査	筑波大学教授	農学博士	鈴木 雅和
副査	筑波大学教授	博士（工学）	野中 勝利
副査	筑波大学准教授	博士（農学）	黒田 乃生

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本研究の目的は、福島県須賀川市と鏡石町にまたがる岩瀬牧場を、日本における近代化産業遺産の一つとしてとらえ、その価値について考察し、現状における問題点を抽出することによって、今後の保全のあり方に関する知見を得ようとするものである。

### （対象と方法）

1876（明治9）年に行われた明治天皇による東北巡幸を契機として、東北地方の荒地開拓・産業奨励事業が構想された。明治政府が日本の近代化を図る一環において、食の西洋化を進めるためには西洋式牧場を導入することが急務とされた。その適地として1880（明治13）年に、鏡石村・浜田村に広がる六軒原と呼ばれた草原地帯約650haが、官有第一種皇宮付属地として指定され、そこに宮内省御料局直営の「宮内省御開墾所」が開設された。これが日本最初の官営西洋式牧場である。その後、様々な歴史の変遷を経て、規模は縮小されたが、民間企業の経営する「岩瀬牧場」として存続している。

本研究は、岩瀬牧場に関する国（宮内省）・福島県・須賀川市・鏡石町・牧場所有の文献・資料を調査し、岩瀬牧場に関連した東北開拓の歴史的経緯と土地利用変遷を明らかにした。さらに岩瀬牧場の運営状況、土地利用および景観調査、建物・工作物・産業機械類・植栽などに関する観察・実測調査を行い、それら資源の活用に関する問題点と課題を抽出し、保全方策に関するデザイン提言を行った。

### （結果）

岩瀬牧場は、福島県中南部の開拓事業の変遷、つまり第1期（1873-1918）殖産興業と士族授産政策による開拓、第2期（1919-1945）食料増産に向けた開拓、第3期（1946-1964）戦後の緊急開拓事業から羽鳥用水の完成、という流れに影響を受けている。東北本線鏡石駅は牧場開設に伴い設置されたものである。経営形態は宮内省直営から岡部長職子爵への貸与、渋沢栄一を含む財界人への縁故募集による

順宜畜産株式会社、日本畜産株式会社、有限会社岩瀬牧場（現在）と変遷し、事業内容も牧場専業から牧主農従、農主牧従、そして観光牧場へと変遷している。面積規模は漸減したが、牧場周辺が灌漑により水田景観に変質している中で、広大な草地としての原風景を残している。須賀川市の文化財として登録されている高床式トウモロコシ貯蔵庫のほか、明治・大正・昭和初期に建設された牛舎・板倉・コンクリートサイロ・事務所棟は、東日本大震災を経ても健在であり、将来の文化財登録を視野に入れて実測調査を行った。世界で最初に量産化されたフォードソンF型トラクターは産業機械史的に見て貴重な機種であるが、国内現存3台中の1台を有している。日本で最初にホルスタイン牛を輸入し、その際にオランダから寄贈された鐘は鏡石町の文化財となっている。文部省唱歌「牧場の朝」はこの牧場をモデルとして作詞され、鐘の音やポプラ並木は多くの人々の心象風景となっている。明治期に植栽されたイチヨウ・プラタナス・ソメイヨシノ・ポプラ類は樹齢100年を超える巨木になっており、これが牧場景観の骨格を形成している。以上から岩瀬牧場は、歴史・建築・牧畜業・産業機械・景観的にみて、東北地方固有の歴史的背景を有する近代化産業遺産であることが明らかになった。しかし現地調査の結果、これら資源が有効に活用されているとは言い難く、運営・維持管理状況などに様々な問題点を有している。この結果を踏まえて、牧場の運営、土地利用、各種施設整備、各種資源の有効活用、植栽景観整備、地域連携、組織連携、文化財登録、観光計画、広報戦略など、保全に向けた種々の提言を行った。

#### （考察）

岩瀬牧場は、牧畜業により東北地方の開拓を行うという明治政府の意図を、現在において彷彿とさせる資源を種々残しており、東日本大震災からの東北復興において、この近代産業遺産を観光的に活用できる余地は大きい。そのためには、近代化産業遺産であることの認識とそれに基づく保全対策の実行が急務である。岩瀬牧場と同様に、他の未評価な近代化産業遺産を再発見し保全する方法論として、本研究における調査手順、遺産価値の判断根拠および保全方策の考え方についてとりまとめた。

## 審査の結果の要旨

#### （批評）

岩瀬牧場の前身は、日本で最初の官営西洋式牧場であり、その歴史的経緯・現状・今後の保全策について研究することには大きな意義がある。岩瀬牧場に関する学術論文は本研究結果以外には発表されておらず、本研究の独自性が認められる。本研究を進めるにあたって、関連文献・資料を丹念に調査分析し、現況の実測調査を行い、その遺産的価値について分析するなど、妥当で着実な方法論を用いている。その結果に基づき、岩瀬牧場を東北地方における価値ある近代化産業遺産の一つとして認識し、その価値を活かしきれていない現状を明らかにした上で、今後の保全策について具体的な提言に結び付けるなど、有意な知見が得られている。本研究成果の一部について発表した査読論文および口頭発表は2012年度日本造園学会全国大会におけるベストペーパー賞を受賞し、著者は2014年度から日本学術振興会特別研究員として採用されるなど、外部においても学術性と研究発展性が高く評価されている。

平成27年1月14日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。